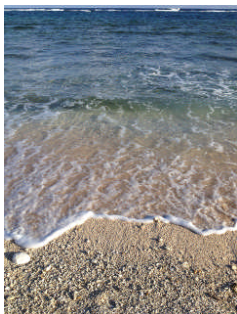
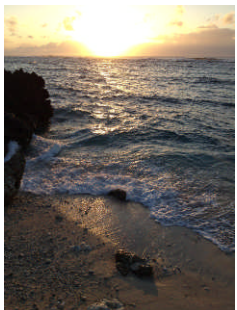


編集室から

毎月このニュースを発行する際、表紙を飾るカバー写真は前年同月撮影のものから選んでいます。その度、一年前は何をしていたのか振り返りの時間にもなっています。



昨年の今月は、ある業界の研修のための旅行に出かけていました。



普段、北陸に居ると夕日が日本海に沈むのですが、朝日は北アルプス系の山から昇ります。研修先は太平洋に面していて二つ目の写真は海から昇るご来光です。北陸人にとっては旅に出なければ拝めない光景でした。

企画・手配の御世話をしていただいたIさんが、とても熱心に下調べをしてくれたお蔭で、大変充実した。それでいて全てがたおやかで心地好い時間を、全国から集った素敵な方々と過ごすことができました。

ひとをおもてなしする・コーディネートするということの原点を改めて味あわせて頂いた気がしました。



旅・食は記憶と申します。時間の経過と共にキラ星のごとく光を増してゆく旅の記憶...

そんな素晴らしいお手伝いができる人になりたいものです。



最後の写真には何が写っているかお分かりですか？o(^o^)(は)



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆
していただいている川島さん
が「能登の夜市」の姉妹店を
開店されました。

上京された際、ご利用になっ
てみてください。

もちろん、川島さんご自身も
お店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00～24:00

金曜17:00～28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3ライオンズマン
ション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術
者を育てることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、
計画マンがどのようなことを考えているのか
などに触れて、少しでも業界を知っていただ
ければと考えて編集しています。

2014/10

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2014/10

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

神意月



白山比咩神社にて
by hama

濱のつばやき 『思い遣りのチカラ』

思い遣りと云う。

一般的には「相手への優しさ・配慮」と捕らえられているのではないだろうか。

しかし、どうやらこの言葉はもう少し深い意味を持つているのではないかと感じている。

類似の言葉に「察する」「慮る」があるが、これらの「異なる言葉」があるということとは、少しずつ微妙に異なるニュアンスを区別し・表現したいという欲求があったからだと推察できまいか。

これらの言葉を敢えて多少乱暴に解説するならば、次のようになるのではないかと思う。

察する：相手の気配・感情を感覚的に感じ取る
 慮る：相手の立場・役回りを理性的に汲み取る

「思い遣る」はどうなるのか。

察するが感性的、慮るが理性的とするならば、両者の中間、あるいは中立・中庸の状態にあって相手を想うことではないか。言葉の原義を辿ると、自分の「思い」を相手に「遣わす」ことになる。つまり、相手の気持ち・心情といった言葉にできない感情の源泉部分に、自分の「思い」を「遣わ」して、相手が抱いている感情そのものに対して共振・共感していく。そこから得られる相手の願い・望みを汲み取り翻訳して行動に顕すため、結果として優しい言動となり、あるいは深遠なる配慮を感じ取れる言動になっていくのではないだろうか。

相手の心情を察し・立場を理解できた上で取られる言動が本当の思い遣りであり、図解するとBの領域だけになることが分かる。

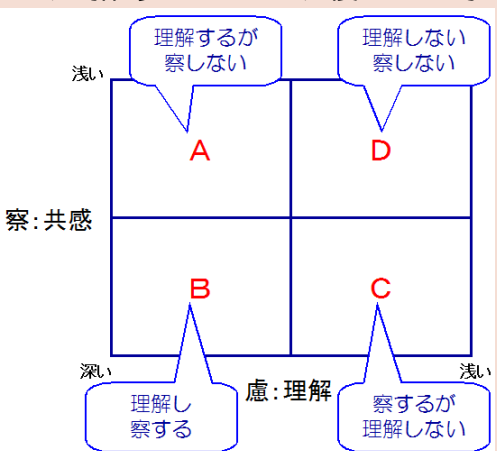
先日、とある探し物のために自宅の蔵に上がった。年代物から比較的新しいものまで、数々の「取って置き」の箱の中から次々と顔を出したさまざまな食器たち。箱の熨斗紙を見れば、贈り主と年代が分かる。古くても野暮ったさを感じさせないものから、新しくてもちよつと使い途が浮かばないものまで、幅広い。

最も端的に、贈り主のセンスが顕れるのが贈答品だろう。どんな物を贈るのか？というより、御届け先の方が何を望んでいるかを察し・慮った上での品選びなのか、が「思い遣り」を発揮する上では、最も問われてしまうことなのだろう。

家内は、必ず喜ばれる贈り物をする。先様に想いを巡らせ、好みの傾向を思い浮かべて、丁寧に選んでいく。いつ・どうやって先方の好みの情報を入手したのか、その配慮のない自分にはサッパリ分からない。

うっかり自分だけが気に入ったものを選んでしまうと、相手を思い浮かべないで選ばれたそれは、恐らく図で言うところのスタンスで選択された品々なのではないか。

図解から理論的に存在が推察される二つの領域、すなわち「理性だけが優先するA・感性だけが優先するC」は、Dに比べて相手の事を判ったつもりになっている危うい状態のことを指しているのかも知れない。



年に数えるほどの贈り物だけではなく、私たちは日々だれかに言葉や態度を「贈って」いる。日々の言動にこそ、もつとも相手への敬意・尊重度合いが顕れる。それらは思い遣りに満ち満ちて発せられているのか…。自らを振り返ると甚だ心もとない。

記憶を辿れば、ほとんど無思慮・無思い遣りの連続のようなシーンばかり思い出される。冷や汗物の我が人生だが、一方でその時、周囲に居合わせた方々には、相応の我慢、あるいは辛抱強い見守りをしていただいたのは間違いなく、感謝しか湧かなくなる。

維新前後の偉人伝などを読むと、「思い遣る」能力は、かつての日本人の民族的なお家芸だったのではないかとさえ感じられる。

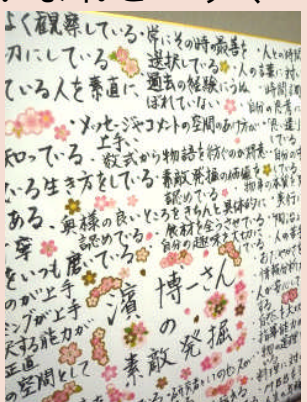
しかし、数次にわたる文化的な断絶を経た今日、それは、表面的な優しさ」と同義にされてしまう解釈しかできないレベルにまで、我々の意識が薄っぺらくなってしまうたのかも知れない。

弊社では、これまで主に法人・公共団体の事業に関連した起業のお手伝いをしてきたが、今年から個人の方の起業を御手伝いする「言葉塾」をスタートさせた。その第一期生の方が「素敵発掘」という事業を始められた。

相手の方の素晴らしい点を、大判の色紙一杯に書き込んでいく。「百近い自分の「素敵」を贈られた人は皆大きく感激する。

「こんな処までよく見てくれていたんですね。」

ほとんどの人が、こう口にされた後、照れたり、大切に抱えるように持ち帰られていく。



相手の素敵な点を、具体的に数多く挙げて贈る「素敵発掘」の運動は、本当の思い遣りのやり方を忘れかけている現代の日本人の「思い遣り力」を再生する契機の一つになる可能性を大いに秘めているに違いない。

この10月4日から第10回目のB Jリーグ（日本プロバスケットボールリーグ）が開幕する。B Jリーグといっても身近にチームがなければ、バスケットファンを除きご存知ない方も多いかも。男子バスケットボール界には、旧日本リーグからの流れを引くNBL（日本バスケットボールリーグ）とB Jの2リーグが存在する。NBLは伝統的な大企業のチームが多く、日本代表選手のほとんどがNBLから選出されていることなどから、B Jより注目度が高くなっている。

B Jリーグは、今年のリグ戦に福島県のチームが加わり22チームとなった。さらに来年は長崎県にもチームが誕生することが決定し、47都道府県のほぼ半分にチームが存在することになり、全国的に広がりを見せてきている。

前回リーグの1試合あたりホームゲーム（各26試合）の観客動員数をチーム別にみると、沖縄3,219人、秋田2,669人、新潟2,502人、浜松・東三河（静岡県浜松市と愛知県東三河地区をホームタウン）2,206人、仙台1,893人、富山1,848人、青森1,668人となっている。逆に少ないのは横浜1,268人、京都1,187人、東京1,012人（多摩地域の都市で試合開催）。以下、大分999人、福岡992人である。概ね、地方圏が大都市圏より観客動員が多いことがわかる。実数は沖縄が1位であるが、人口当たりの観客動員数に換算すると秋田が1位となる。

チームの安定経営には、コンスタントに2,500人程度の観客動員が必要とのことであり、また多くのチームがそのラインに達していないにせよ、いくつかの地方圏のチームは地域の盛り上がりや寄与している。これは各チームのマネジメント力、各県のバスケットをめぐる環境など様々な要因が考えられるが、地方圏のチームはより地域密着でファンや支援企業の応援を開拓・期待できるのに対し、大都市圏のチームは野球、サッカーなど他プロスポーツとの兼ね合いや、地域密着という方針が立てにくい結果であろうか。また、東北や北陸のチームの観客動員が多い理由には、秋から春先という期間に行く場所ができた、地域を応援し熱くなるものができたことなどが挙げられよう。

「秋田ノーザンハピネッツ」はチーム誕生5年目を迎え、すっかり秋田に根を下ろした。その理由としては、前ヘッドコーチで全日本女子チームの監督も務めた中村和雄氏（男鹿市出身）のカリスマ的な人気・求心力、前回の東カンファレンス（地区）優勝、リーグ準優勝とチームが優勝を争える実力になってきたことに加え、秋田県にバスケットの土壌が根付いていることが大きく、一朝一夕にできあがったものではないと感じる。

男子の能代工業高校は、近年、全国大会の優勝から遠ざかっているものの、インターハイ、国体、ウィンターカップの高校バスケットボール3大タイトルにおいて優勝58回の記録を持つ。能代市は「バスケットのまち」を売りにしている。また、昭和50年代には、当時、日本リーグに所属し実質的に秋田の地元企業によるチームであった「秋田いすゞ自動車」が、全日本総合バスケットボール選手権大会で優勝を成し遂げたこともある。近年は、バスケットボール女子日本リーグのファイナルの試合が開催され、日本での最高のプレイを間近で見ることができる。このようなことから、県民のバスケットを見る眼は肥えていて厳しいと言われ、秋田のバスケット熱は高い。

その厳しく優しい県民の眼差しのなか、「秋田ノーザンハピネッツ」に、また秋田を熱くすることを期待したいものである。

特に何かがあってこのテーマにしたわけではないのですが、ここ最近の酒蔵さん、小売店、飲食店における日本のお酒（日本酒、焼酎、ワイン）への取り組みが本当にすごいと感じ、その感じたままを書こうと思った次第です。

当社も保有する全店舗にて日本酒をひとつの軸に据えているのですが、それでも最近リサーチしたお店で「ここはお勧め」というところをご紹介します。

1.目黒 「KIRAZ(きらず)」

目黒と恵比寿の間に位置し、少し隠れ家的場所にあるお店です。

食事はスペイン料理にも関わらず、お酒は日本酒をワイングラスで出します。

そしてこの組み合わせがまたとても美味。

ここのオーナー兼シェフの女性の方が、お酒とスペイン料理のマリアージュを追求したこちらの店をつくられたのですが、なんとこの方徳島県の三芳菊酒造の娘さんなのです。

身近に日本酒業界の低落を見て、もっと日本酒が愛されるシーンがあるはずという信念のもと、この店をつくられました。

私が渋谷に日本酒バルChintaraをつくるに至った原点のお店でもあります。

2.渋谷 「米心(まいしん)」

こちらのお店は日本酒の王道をひたすら走る名店です。

何が王道かと言うと

- ・日本酒の種類が100種類以上
- ・日本酒と和食の組み合わせを徹底的に追及している
- ・“地の酒を地の肴”でというコンセプト
- ・利き酒師の更に上級資格「酒匠」が酒を紹介してくれる

という4点において恐らくどの日本酒を扱うお店も後塵を拝すると思います。

そしてこの店のラインナップが非常におもしろい。

先日行った際におすすめされたお酒が長野県にある超有名ワイナリー「小布施ワイナリー」が醸造した日本酒なのですが、独特の酸味から「えっ、これ日本酒なの？」という味わいです。ブランドテイストिंगしたら恐らく白ワインと間違える方もいると思います。

そしてこのお酒に鮎の燻製が抜群に合うのです。

当社の能登の夜市も手前味噌ながらすごく魅力的なお店だと思っていますが、ここはより全国に視野を広げて提案してくるのです。

3.三軒茶屋 「糧(かて)」

三軒茶屋駅から徒歩5分。5分といっても中心街から随分と離れた感のある住宅街入口のビル地下にある「糧」は、熊本出身のオーナーさんが郷土の味を伝えたく作られたお店です。

まず最初に、ここの辛子蓮根は絶品です。

九州のお店という事で「焼酎ウリ」なのと思いきや、焼酎だけでなく、オーナーさんが酒蔵を回って厳選した日本酒や日本ワインにも力を入れています。

そしてこのお店が“すごい”と感じた最大の理由は『店主がお酒とお料理と人をこよなく愛する』姿勢です。2回くらいの来店だったにも関わらず、名前はもちろんどんなお酒が好みで、どんなお料理を前回召し上がったかを事細かく覚えているのです。

「よくそこまで覚えてますね」と聞くとその回答がまたおもしろい。

『我が家に来てくれた方は覚えるのが当然じゃないですか』

確かに自宅に人を呼んでいるという姿勢、能登でいう“よばれの精神”です。

勉強になりました。

どのお店も一見ならぬ“一呑、一食の価値あり”です。

「トラベルはトラブルが語源」を地でいくような旅が始まった。長女から「おとん、ロシアに行こうと思うけど、一緒に行く？」彼女は大学4年、就職先も何とか内定し、ひと安心したところだ。

ウクライナ情勢を巡るロシアに経済制裁が激しくなっているのに大丈夫かな？心配よりもこれを逃したらロシアに行くことは無いだろうな、長女との旅も就職したら難しくなるだろうなの気持ちが上回り行くことにした。

8月29日に成田を無事に発った。飛行機は最新鋭らしく窓のブラインドが電気仕掛けで調光できる。目の前の各席のモニターも使い勝手、ソフトともに申し分なし。最初に行くところはサンクトペテルブルクだが、モスクワのドモジド空港から国内線への乗り換えが必要だ。予定では飛行機到着から1時間45分後に国内線のサンクトペテルブルク行きの飛行機が飛び立つ、この短さを長女は心配していた。

到着予定時間を20分ほど前に着き、安心したのもつかの間、入国審査の窓口に入がない。当然、長い列となり時間は確実に刻んでゆく。や、ヤバい。長女が機転を利かし列を外れ、ロシアの職員に乗り継ぎがあり時間がないことを訴えキャビンアテンダントが通る別のゲートから出させてもらってオッケー。荷物を受け取り国内線窓口に向かったが、ここで運はつきた。日本の常識では考えられないことが起こったのだ。

ものすごく時間をかけて長女のEチケットから搭乗券を発行したが、小生の分は出さずにレイトカウンターに廻れというのだ。そのカウンターでももたもた時間がかっていた、そこに日本人の若者二人も来た。出発時刻が刻々と迫るが係員は他の客の対応に手間取りタイムオーバー。長女の荷物を乗せて飛行機は発ってしまった。

結局、次の便のチケットを買う羽目になった。ここでも悲劇は待っていた。最終便のチケットが確保できカードで支払おうとしたら、何とVISAもマスターズも使えない。どうやら経済制裁でアメリカのカード会社である両社のカードが使えなかったのだ。もたもた両替してお金を払おうとしたところ、すでに二枚のチケットは売られてしまっていた。な、何と！結局、先の若者二人と空港泊ということになってしまった。

ああ、ロシアはダメだこりゃ。現地でロシア語学するための交換留学に来た阪大生とロシアでバレエ学校に学ぶ18歳の若者が旅の道連れになった。キャッシングでルーブルをおろそうにも、持参した全てのカードは駄

目だった。お、お金がない。さあどうする？日本領事館に駆け込むことを考えたが、週末は休み、万事休すだった。空港内の飲食店で恐る恐るカードを出し、暗証番号を押すと、何と！通るではないか！その後も旅の期間中カード支払いができないことはなかった。

悪夢の騒動の結果、丸一日モスクワ空港で過ごし、やっとの思いでサクトペテルブルクのブルコヴォ空港に着、ホテルから迎えの車が来ていて、無事にチェックイン。

サンクトペテルブルクはモスクワに次ぐロシア第2の都市で、バルト海東部のフィンランド湾最東部に面するネヴァ川の河口デルタに位置しヨーロッパで最も美しい街の一つだ。都市の名は「聖ペテロの街」を意味する。ピョートル大帝が1700年代に建都を命じ沼地を開拓し、自分と同名の聖人ペテロの名にちなんで付けたもの。

1914年、第1次世界大戦が始まりロシアがドイツの敵対関係になるとロシア語風にペテルグルードと改められ、さらにロシア革命によりソビエト連邦が成立すると1924年よりレーニンにちなんでレニングラードに改名された。ソ連崩壊後1991年に住民投票でサンクトペテルブルクに戻った。

豪華な宮殿、大聖堂、高さの揃った街並、格式高い劇場、水路には観光客を乗せた舟が行き交う素晴らしい街だ。

やっとの思いで着いた時には夜もすでに遅くなっていたので、近くのスーパーマーケットで、ライ麦でできた黒パン、チーズ、ハム、ビールにワイン、スープを買って部屋で夕食。ホテルは四ツ星だけあって快適。気絶するように寝付いた。

翌朝に部屋に入れて飲んだ紅茶がうまい。長女曰く「硬水で入れた紅茶は何でもおいしい、緑茶はダメだけどね。」

ホテルの朝食は3000円と高いので、目指すエルミタージュ美術館までの道中にあるパイのレストランに入った。これはいけた。飲み物を兼ねてスープも頼み、昼食抜きで観ることになるエルミタージュ美術館に備えた。メトロポリタン、ルーブルと並ぶ世界的美術館に期待が高まる。(続く)

